

平成26年新年賀詞交換会

1月9日、市中央生涯学習センターで新年賀詞交換会が開催され、243人の市民が牛久市のさらなる飛躍、発展を祈りました。

ここでは、主催者代表の池辺勝幸市長のあいさつを紹介します。

市長あいさつ(要旨)

◇10年間を振り返って

皆さん、明けましておめでとございます。去年は色々ありましたけれども、今年新たな年を迎えて夢の多いさまざまな計画が練られたものと、また新たな志が決められたものとご推察申し上げます。

私が市長に就任させていただきましたが、若して満10年が過ぎたわけですが、若干時間をいただいております。



まずは、私の1期目ですが、4年間、これはまさしくお金との戦いでした。会社経営に例えると、運転資金がない、そういう状況でした。そして、社員は働かない、倒産会社そのものでした。このままでいけば、牛久は夢も希望もない、そしてただ無駄な人件費を払って借金漬けで終わりというのが10年前の状況でした。それをまず4年間で、市民の皆さんが必要としていながら困っているものを直す、そういうことをするための財源確保のために動いたのが1期目でした。

そして、2期目から若干ずつではありますがありますが、市民の皆さまのさまざまな不都合なところを直す、そのような作業をしてまいりました。2期目半ば辺りからようやく、これからの牛久の対応ということで本格的に少子高齢化、人口減少、そして税収減、そういう中であつても、牛久のまちが夢の多いまちとして残るよつにさまざまな施策を行ってきた、というのが大きい流れであります。

その施策を実施するための財源を捻出し、そしてさまざまな施策を行

うために、市役所の大幅な改革、また、それまでの市役所のありようを変える、そういうことをしてきたわけです。

◇人口減・税収減を止めるために

日本全国では、去年1年間で24万4千人の人口が減ったと聞いています。この人口減少というのは、地方都市にとつては、生死の分かれ道となります。具体的に言うと、もう20年以上前から指摘されていることですが、限界集落だとかいろいろ言葉があります。

また、牛久市民の世帯所得を見てもみすと、10年前、世帯所得は600万円以上ありました、今は400万円です。世帯所得が、この10年間で200万円以上減少しました。

全国においては、この20年で北海道は札幌に、そして東北は仙台に、そして関東は東京に一極集中しています。そういう中であつて、この牛久のまちが北関東、首都圏、茨城県、県南地区、こういうよつな地域にあつて、人口の集まるよつなまちにしないでなりません。

そして、税収がどんどん落ちていきます。税収減も止めて、将来の安定した行政サービスの提供を継続できるまちにする、これが牛久市の基本的な課題であります。

その作業をこの4、5年前から少しずつ始めてようやく、今その流れ

に乗ろうとしています。牛久のまちを継続し、そして若い人たちが集まってくるまち、そして税収も減少・縮小しないで維持し、場合によっては拡大するまち、そういうまちにするためにさまざまな手を打ってきました。

一番先に手を打ったのは、一言でいえば、女の人が住みやすいまちにする、女の人が働いても子育ての負担をなるべく少なくする、ということです。若い世代は共稼ぎが当たり前です。保育園、そして小学校に入っただ子どもたちの児童クラブの充実、これは牛久市が全て事業として行っています。そして、子育ての負担を減らすため、フクチン接種から始まり、さまざまな医療費の負担などをしてまいりました。

それと同時に、学校、特に小中学校の教育の充実をしてまいりました。これは、牛久市の投資の半分以上で、断トツで学校教育の投資をしてまいりました。この2つによつて、今牛久市には子育て世代が集まってきています。そして、赤ちゃんの数も亡くなる方より増えています。しかし、まだ牛久市の税収は減少の一途です。ですから、牛久市の課題は、今までの施策をより充実させて、若い人口、子育て世代の人口増の流れを維持すること、そして、税収減を止めることです。

◇牛久駅を中心とした活性化

今人口が増えているといっても、若い人たちの人口増はひたち野つく地区だけであります。しかし、このいい現象を、牛久駅を中心とした旧市街地、住宅地にその流れを呼び込まなくてはなりません。東みどり野の調整池の整備から始まり、この4、5年の間、インフラの整備をしてまいりました。ようやく、去年の後半辺りから、牛久駅の東口、行政区でいえば東区や向台行政区の辺りの開発行為の雨水の受け皿がようやくできつつあります。牛久駅の西口全般にも現在調整池を6カ所同時に整備を進めています。若い人たちがひたち野地区と同じように、牛久駅周辺の既存の住宅地にも住みたくなるようなまちづくりをする、そのために牛久駅の東口から変えなくてはなりません。その街並整備の一番の大本として、牛久駅東口広場を約85%の国の補助金を受けながら、整備を始めます。

◇人口が増えているまち・牛久

牛久市は茨城県内において、常磐線沿線で人口が増えているたった一つの駅のあるまちです。牛久市以外は、一部集約化して横ばいになっているところもありますが、あとは人口が減っています。若い人たちが集まってくるまちに脱皮しなければならぬ、これが牛久市の課題です。

例えば、牛久の農業の実態を見てください。高齢化でもって後継者がいない。それだけでなく、後継者がいない中でやってきた高齢者の方が後継ぎの子供たちが帰って来ない、農地の耕作もできない、収入もないという状況になっていきます。

ですから、牛久市は直接出資してうしくグリーンファームという株式会社を設立しました。そして、今後とも農協と一緒に、具体的な農業耕作をする農業法人を充実させていきたいと考えています。それと同時に、牛久は去年、バイオマス産業都市ということ指定を受けました。これは全国で8カ所しかないの1カ所です。

◇グレーヴェ・イン・キアンティ市と友好都市提携

今後は、農業も農地の集約化も、市が農業委員会、農協と一緒にやってそして農家の方と一緒に牛久なりの農業経営の形を作っていくかなくてはなりません。それは、牛久市民の食糧確保であり、地産地消であります。そのために、イタリアのグレーヴェ・イン・キアンティ市と友好都市の提携をしたわけです。このまちは、非常に疲弊した農村を立て直したまちであり、一番典型的なアグリツーリズムのまちであり、スローフード、スローシティの模範的なまちであります。キアンティクラシコ

というトスカナ州で有名なワインがあります。そのワインを牛久に行けば飲むまちということができま

◇コミュニティ活動を通じた絆

少子化・高齢化、この両方乗り越えて、そして若い世代にも、そして年を取って、この牛久のまちを終わりのすみかとした人たちにとつても、住みやすいまちにしていきたい

ために、コミュニティをしっかりと、コミュニティ活動を通して、市民の皆さんが絆を深くする。そして地元で商売されているお店も大事にしていきたい。そして自分たちの食べ物は牛久で取れたものを優先して食べようじゃないか、そして今後、所得格差がもっと激しくなっていく中で、お金がないから生きていけない、そんな人が1人も出ないように、お互いに助け合おうじゃありませんか。そういうような、コミュニティのしっかりとまちにするためにも、地区社協をつくり、8つの小学校区に行政区を分け直す、そしてその小学校区ごとに小学校を中心としながら教育を充実し、そして子育てを支え、そしてお年寄りの介護も支えるようにしていきます。

また、BDF事業も大体軌道に乗ってきました。今年の4月以降、新しいディーゼル車にも使える、そして新しい発電機にも使える、その

ようなBDF燃料に生まれ変わります。冬場の暖房も木質のペレットがバイオマス産都市で補助を受けました。うしくグリーンファームにそのペレット工場が出来上がります。冬場の暖房を身近にあるものを利用して、自分たちの生活を律していく、里山の精神というものを再度私たちは思い出さなくてはならないのではないでしようか。

◇市民・行政一体のまちづくり

牛久市役所は、牛久のまちづくりのさまざまな計画を自分たちで作れるようになり、この10年間の間に、福祉計画から始まり、都市マスタープランや、そして環境計画など、みんな市の職員が手作りで、市民の皆さんと一緒に、そして大学の先生のご指導も仰ぎながら、自前のまちづくりの計画をようやく作れるようになってきました。これを皆さんにご報告申し上げます。市の職員も一生懸命頑張っていますので、ぜひとも皆さんと一緒に、これからの夢のあるまちを一緒につくっていききたいと思っております。よろしくお願ひ申し上げます。

